

28P-am09

代表的疾患の効果的実習に向けた病院・薬局・大学の連携トライアル（第2報）
○岩田 紘樹^{1,2}, 鈴木 小夜¹, 早川 智久^{1,3}, 地引 綾¹, 横山 雄太¹, 山浦 克典^{1,2},
望月 眞弓^{1,3}, 中村 智徳¹（¹慶應大薬, ²慶應大薬局, ³慶應大病院薬）

【目的】改訂モデル・コアカリキュラムの実務実習では、代表的疾患の実習に関して病院・薬局・大学間の連携が求められている。我々は、実務実習 WEB システムに導入予定の「週報」の書式等を用いたトライアルを実施しており、2016 年度は実習生 4 名を対象に、週報にて代表的疾患に関わった人数を記載させた（日本薬学会第 137 年会にて報告）。2017 年度はⅡ期に慶應義塾大学病院（以下慶應病院）で実習を行う 25 名を対象を拡大してトライアルを行った。

【方法】①Ⅰ期実習開始前に、実習生 25 名のⅠ期薬局（24 薬局）に対して、代表的疾患の実習対応可否及び継続性について調査し、結果を慶應病院へ提供した。②実習生 25 名にⅠ期実習中に週報（紙媒体）を作成させ、服薬指導・処方解析に関わった人数を記載させた。疾患分類には代表的 8 疾患の他、脂質異常症や消化器疾患等 4 分類を新たに加えた。Ⅰ期終了後に学生個々の集計結果を慶應病院へ提供した。また、Ⅱ期実習中も人数の記載を継続させた。

【結果・考察】代表的疾患の実習対応可否及び継続性について、24 薬局から得られた回答を慶應病院へ提供することができた。また、週報に記載された服薬指導・処方解析の実施人数から、病院実習で網羅すべき疾患について確認することができた。慶應病院への情報提供時は、11 週間の合計人数を一覧表にまとめて、未実施の部分には色を付けて明示するようにした上で、実習病棟（診療科）の決定等に活用することを提案した。代表的 8 疾患全てで服薬指導・処方解析を実施した人数の割合はⅠ期薬局実習では 44%（11/25）であったが、Ⅱ期病院実習終了時には 72%（18/25）に増加していた。今後、病院の指導薬剤師へ、薬局での代表的疾患の実習内容に関する情報の活用についてアンケート調査を行う予定である。